

仲里ユキさん

1926(大正15)年生まれ

沖縄県与那原町

所属 女子青年団

野戦重砲兵第七連隊医務室

戦地 南城市・大里～佐敷(さしき)

～知念方面



●1944(昭和19)年末 野戦重砲兵第七連隊(球4152)医務室勤務に

地元の女子青年団に入り、陣地構築等作業をしているうちに首里から来た人に呼ばれて、「あんたたち、いよいよ戦争はもう間近になっているけれど、球4152部隊で働いてくれないか。戦争が激しくなっても家族の面倒は見てあげるよ」と言われた。親に相談すると、「自分で決めなさい」ということだったので、働くことにした。

はじめの頃は、作業で怪我をした兵隊を軍医が治療するのを見ていた。見ているだけでも体が震えた。治療が終わると軍医に「この馬鹿野郎。このぐらいの傷で震えていて、戦争になったらどうするんだ！」とさんざん怒られた。

●1945(昭和20)年5月26日 米軍が運玉森を攻撃しているのが見えた

部隊長が「今日は空襲の恐れがあるから絶対外には出ないようにしなさい」と命令した。3時15分、爆弾が落ちてきた。ちょうど仲間の仲里ヒロ子さんがトイレに行っていて、入り口に着いた時に爆風で壕の中に吹き飛ばされた。軽傷ですんだが、寝ていた負傷兵が2人、落ちてきた岩につぶされて即死。軍医が「飛行機が緩和になったら脱出しよう」と言っていることになって脱出することになった。兵器隊の壕に移動して一月くらい世話になった。このころから負傷兵が増え始めた。重傷患者のおかゆを炊かなければならないが、みんな外に出るのを嫌がった。しかたがないので自分が重機分隊の七輪を使って外におかゆを炊きに行った。炊き終わるころに、艦砲が落ちて、背中に衝撃を受けた。破片が直撃していると思って、「背中をやられた」と、壕に飛び込んだが、傷一つなかった。

部隊長が医務室は2つに分かれてどこどこに出発するように命令して、佐敷町の2中隊の壕に移動することになった。佐敷に着いて4、5日すると、敵は佐敷まできているというので、知念岬の3中隊の壕に移動することになった。ここでは弾はあまりこなかった。朝起きるとひさしぶりに外に出て、深呼吸をして「あー、よかったねえ」と思った。

再び敵が来ているということで、夜に何十メートルもある絶壁を通して、海岸に下りた。下りたら照明弾でポンポン照らされてまったく歩けなかった。新原の海岸には避難民がたくさん集まっていた。

本隊のいる具志頭村に向かうことになった。そこに行くためには敵中を突破しなければならなかった。

●1945(昭和20)年6月9日ごろ 具志頭方面へ移動

出発前に准尉に「昼寝をしなさい」と言われて、同郷の瀬底シズさんとお互いに腕枕をして寝ていた。そのためか二人とも同じ気持ちになっていて、同じ言葉がすぐに出た。万一どちらかが生き残った場合には、親兄弟に国のために一生懸命つくして死んでいったことを伝えるようにと二人の中で一致した。

川を渡り終わったところでものすごい攻撃にあった。手榴弾とかいろいろなものが投げ込まれ、シズさんが「あーっ！」と大きい声を上げて倒れた。背中をやられていて、そのまま息を引き取った。隣にいた仲間のキヨさんは手足をやられてキョロキョロしている。キヨさんと「じゃあね。シズさんと一緒に逝こうね」と言って、自決用の消毒剤を出したが、キヨさんがうまく取り出せずにいる間に、シズさんと決めたことを思い出して飲むのをやめた。

部隊が目の前だから、昼は死んだふりをして夜になったら逃げようと話していると、米軍が声を機械で探知したのか弾が飛んできて背中に当たった。火傷したような感覚で、血が流れていると思った。死ぬ前に傷口をさわってみようと手を当てたら、肌着まで破けていたが傷がなかった。「あれ、私生きてる」。

そのまま仰向けになっていると、五メートルくらいはなれた所で「かあーちゃーん！」という声がした。銃剣の音もしたので、突撃に行く元気な患者がいるのかと思って見ると、初年兵の患者が銃剣で自分の首を切ろうとしていた。「あ、ちょっとまって下さい。そんなことしないで、私と一緒に死んだふりして逃げましょう」と言ったけれど、初年兵は首を振った。その直後にまた弾が飛んできて、止んでから初年兵を見ると、頭が半分なくなっていた。

夜が明けると米兵がべらべらしゃべっている。周りを囲まれていた。一人でも殺してやろうと、持っていた手榴弾を投げようとした時に、うしろから米兵がきて図囊のベルトを切って中身を持って行ってしまった。米兵は河原の木を切って毛布をかけて担架を作った。それにキヨさんを乗せて、自分は歩いて第二線に連れていかれた。

(取材日:2012年2月9日)